

井戸敏三 兵庫県知事挨拶

Opening Remark by Mr. Toshizo ISO, Governor of Hyogo Prefecture

The Hyogo Prefecture faces the three challenges. Firstly, the stability of living needs to be ensured for the elderly persons. Communal care is of special importance. Secondly, the liveliness of streets is hoped to be restored, although it is not easy. Thirdly, preserving and relaying the experience of earthquake and lessons of recovery and reconstruction need to be in place, which is expected to lead to disaster reduction of the future. In view of this, oral histories are being collected from disaster victims and their families. It is strongly hoped this Forum leads to the formulation of the society of disaster reduction and disaster culture.



震災から 15 年が経ちました。15 年は私たちにとって大変長かったという思いと、短かったという思いがないまぜになっています。長かったとは、ようやくここまで来ることができた、復旧復興がここまで来たということです。短かったとは、まだまだ解決できていない課題が残っているということということです。

課題は三つあります。一つ目は高齢者の問題です。震災の時の 65 歳は 80 歳、70 歳は 85 歳になります。15 年経つということは、体も気力も被災している上に弱っていくということです。このような人たちの生活の安定をどう確保していくのか、一人だけ取り残されている人達の孤立をどのように解決していくのか。このようなことを、見守りと地域ぐるみで対応していかななくてはなりません。二つ目はまちの賑わいです。相変わらず従前の賑わいを取り戻せないでいる地域が残っています。これをどう回復していくか。地域の人たちの長い努力と人々が集まってくれるようなしかけが必要です。行政も地域の人々、ボランティアも一緒になって工夫して取り組んできましたが、決め手は無く難しい問題です。三つ目は震災の経験や復旧復興の教訓を伝えて共有財産にする、そしてそれを次の災害に対して出発点にして備えていく、減災社会をつくりあげていく、ということです。

震災では 6434 名が無くなり、30 万を超える人々が被災しました。その一つひとつが違います。6434 というかたまりがあるのではなく、一つひとつの人生があった筈です。家族があった筈です。友だち、被災の状況も違ってきます。一つひとつが違っていているという所から私たちは被害というもの、犠牲というものを考えていかなければいけないと思っています。そして、犠牲者の近親者、友だちからその方々の様子をお聞きするオーラルヒストリーという事業を実施しています。一人ひとりが異なるというところからこの事業は出発しています。震災で犠牲者が出たということと、一人ひとりの犠牲と言うこととは質が異

なることを認識していかなければならないと考えたからです。これこそまさしく語り継ぎの出発点だと考えています。

災害に備えるという意味での語り継ぎには、1854年の安政の大地震の時に紀伊半島の村長である濱口梧陵さんが自分の稲わらに火をつけて村人に危険を知らせて山の上に避難をさせて命を助けたというお話があります。稲むらの火というお話です。これは地域ぐるみの防災体制の一つの実例だと思います。私も小学校の教科書で習いました。これも、地域のみんで知っておくことが次の災害に備えるための共通体験になるという実例です。

今回のチリの大地震で20時間後に日本列島に津波が来ました。津波警報も出されました。50年前はこのような警報のシステムはありませんでした。従って、東北地方の太平洋側、三陸海岸では大勢の人々が津波で亡くなりました。今回は津波警報が出されて津波に対する備えをしましたが、残念なことに、5%ぐらいの人しか避難所に避難していないという実態が分かりました。何のための警報だったのか、もう一度点検して備えていく必要があると感じています。

今回の世界災害語り継ぎフォーラムのテーマである語り継ぎということは、私たちの学んだこと、経験したこと、教訓をまさに共有財産にして、これを未来に伝えて、そして災害を避けることはできないが、損害をできるだけ小さくする、また、被害を受けた場合にできるだけ早く立ち上がる、そのためのスタートだと思っています。そのような意味で、世界の被災地の教訓を世界の共有財産として理解しあう、そして災害に対して恐れない、しかし備えはする、受けた場合にはできるだけ早く立ち上がる、そのようなことのスタートにしてほしいと思います。これは大変素晴らしい取り組みです。ハイチの大地震、チリ地震など、21世紀に入っても災害が絶えることはありません。危険はますます増えています。そのような意味で、このフォーラムが、減災社会や災害文化の確立につながっていくことを心から期待しています。被災地である兵庫、神戸であるからこそ、より強く期待しているのです。

写真：表 Photo: Omote